

川に親しむ

尚徳公民館長 **いくた 生田** **ひろのぶ 裕宣** さん(米子市兼久)

今回は日野川の支流、法勝寺川が町の中心を流れる尚徳公民館で、「子どもたちを川で遊ばせたい」と言われる館長の生田裕宣さんを訪ね、法勝寺川の思い出と法勝寺川をきれいにする会の活動、今後の夢をお話して頂きました。

「兼久堤防は昔、桜の時期には市内はもとより周辺の学校が遠足に訪れ、川原には色とりどりの服装をした子どもたちでにぎわっていました。

4月に入ると、農家では朝から夕方暗くなるまで4～50頭の牛の放牧をしていました。牛が草をはみ草が大きくなる間もないので、緑地は芝を敷いたような風景が広がっていました。中州の広場では、子ども達が学校から帰るとスポーツを中心にした遊びの場になっていたんですよ。流れる水は今と違ってきれいで5～6月になれば鮎が日野川から多く法勝寺川へ上がって来ました。法勝寺川は子どもの水泳場所で、深みでは岸に飛び込み台を作り、飛び込み競争など夏休みは毎日のように川遊びをしたことをなつかしく思い出します。」

田植時期になれば農業用水として水を引くので、下流では水位が浅くなるために川遊びが盛ん。鮎ぶちや水にもぐり魚をヤスでついたり手でつかみ取りをしたそうです。夕方になれば川で松明たいまつをかざし、魚を取り焼いて食べたのも大きな楽しみだったとか。

また秋には鮭も上がってきたので、各家庭では4m位の柄と大きなヤスを持ってきて川岸のよどみで鮭を捕ったなど、今とは全く違う法勝寺川の様子を話してくれました。

しかし、30年代からの圃場の構造改善事業や宅地造成、家庭からの下排水等で水は汚れました。また川床が下がったことにより堤防の護岸であった石積みも崩れ川に散乱し、土砂の堆積で川幅は狭くなり砂が流され、極端に深くなった場所があります。牛の放牧も減ったので、川原は



生田 裕宣 氏

雑草が生え放題。清流豊かでのどかな川の姿は、今では想像できません。」

「今、私達はふるさと作りの基本理念を定めました。そのひとつが『悠久の時の流れの中で恵みをもたらしてきた私達の生まれ育った大地尚徳 その美しい自然を大切に守って心の安らぎとゆとりある生活空間づくりにつとめる』と、尚徳の自然との共生をうたっています。

地域の真ん中を流れる大切な川「法勝寺川」。子どもが昆虫、魚、植物などの観察をし、水遊びや子どもからお年よりまであらゆる人達が遊べ、交流・イベントのできる水辺の拠点として、また学校完全五日制に伴う地域がかかわっていくための場所、川の楽校作りを目指しています。」

また生田さんは、法勝寺川・小松谷川をきれいにする会を発足させ年2～3回の清掃活動を行っているほか、青木橋から新青木橋の間を生い茂った竹雑草を地区民あげて除去作業を実施し、区内企業の協力を頂いて川辺の整備を行っています。今後も草刈作業など川原の管理につとめながら、自然に直接触れながら体験学習のできる環境、川の楽校作りに一層取り組んでいくそうです。

「将来的にはキャンベル(アヒル)を川で飼ったり、イカダ流しや橋の梁はりに鯉のぼりを泳がせるなど、子どもたちや地域の人が川に親しめるイベントができたり、上流地区の人達と法勝寺川サミットができれば。」と生田さんは夢を大きく広げておられました。



きれいになった兼久の川原

小学生の川探検 水生生物調査



日野川今昔

故きを温ねて

= たくさんの人々の協力で、菅沢ダムが完成 =

今、水を満々と貯え、洪水調節と下流に水の補給を行っている菅沢ダム「日南湖」の湖底には、かつて本山、中原を含む5集落からなる菅沢地区があり、33戸148人(昭和39年4月)の生活がありました。

春には牛を使つての田起し、近所手伝つての田植え、秋には収穫を祝う祭り、炭焼きの煙など、昔の農村の姿がそこにはありました。

古 来から奥日野地方は、製鉄事業が盛んな土地で、特に菅沢ダムがある印賀川流域は良質な砂鉄を産出し、印賀鋼の名は、古くから知られていました。

明治、大正にかけて盛んに行われていた製鉄も昭和に入るとすたれ、タタラ跡を残すのみと菅沢ダム工事報告書には記しています。



鶯なく本山の春(日南町菅沢 白根紀雄氏提供)



新緑もえる中原(日南町菅沢 白根紀雄氏提供)



掘削が始まったダム地点(日南町菅沢 宮本宏己氏提供)



現在の菅沢ダム